
約束の橋の上で

ゲーメアー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束の橋の上で

【Nコード】

N0131Z

【作者名】

グーメアー

【あらすじ】

橋の上で約束を誓った少年少女四人。いつまでも一緒だと誓いあった彼ら達の前に、一人の少女が転入してきた。少女と関わっていくうちに、少年少女四人それぞれの日常は、少しずつ狂い始めていった……。

少年少女の約束

「やくそくだよ！ぼくたちはいつもいっしょだよ！」

「もしだれかがいなくなっても！ここははずっとずっといっしょだよ！」

「もしみんなばらになったらこのはしのうえでまちあわせだよ！」

「ぜったいだよ！やくそくだよ！」

夕日を背に、少年少女四人が橋の上に立っている。

少年少女四人は、それぞれの小指を一つに合わせて、橋の上での約束を誓った。

もし誰かがいなくなったら、約束の橋の上で待ち合わせをしよう。

もし耐えがたい苦難が待ち受けていても、橋の上で皆を思い出して、その苦難を共用しよう。

もし四人が離れ離れになっても、橋の上での約束を忘れず、心でいつまでも繋がっていよう。

橋の上で誓いあった少年少女四人は、決してこの誓いを忘れはしなかった。

どんなことがあっても……。

天のお話：少女との出会い（前書き）

青く済みわたった空、見上げる少年は空が大好きだった。
いつもと変わらぬ空を見上げる、少年の変わらぬ日常。

しかし、たった一つの異変。小さな小さな一つの異変が、少年が
見上げる空を変えていった。

空は何色に変わるの？赤？緑？黒？

その問いに、少年は答えを出そうとする。

少年が好きな、永遠に広がる空を見上げながら……。

天のお話：少女との出会い

月曜のよく晴れた日の空。空と言っても、晴天、快晴など、同じようでも言い方が色々ある。しかし、多少違えど空はどれも気持ちのいいものだ。

そんな考えが頭をよぎると、俺は歩くのを止めて空を見上げていた。

どこまでも広く続く青い空。どこまで歩いていっても、ここが地球である限り、空はどこまで行っても青い。

じゃあ地球の外はどうだろうか？

たくさん星が光輝いている宇宙は、いったいどんな色をしているのだろうか。

そんなことを考えていると、小さな空間にしようとしている自分が急に馬鹿らしくなってきた。こんな広い青空を見上げる自分は、もっと自由にならなければいけないんじゃないか？

青空を見上げながら、俺は歩いてきた道を戻ることにした。

「どこ行くのかしら？」

「！！！」

上を向いていた首を前に戻す。そこに立っていたのは、自分と同じくらいの少女だ。

「お前、空を見ている。」

「は？何でよ？」

俺は少女と共に、再び空を見上げた。

「この青空をしてみる。これから小さな空間に縛られに行こうという気持ちなんか・・・無くなるだろ？」

言葉が終わると同時に、俺は少女を交わすように走った。元々、こいつにそんな説得なんか効果を持たない。あくまでも今のは気をそらすためだ。気をそらせれば逃げるのは容易だ。

・・・って、あれ？

「あんたまたそうやって学校サボるつもりでしょう！今日という今日は許さないわよ！」

猫を黙らせるかのように、俺の首根っこをガツチリとつかむ少女。「痛い痛い痛い痛い！離せ離せ離せ！離せて！翡翠！」

「いいから学校行くの！今日は絶対に離さないわよ！隆盛！」
そのまま首根っこを掴まれたまま、俺は小さな空間に縛られに行くのだった。

俺の名は銀河^{ぎんが} 隆盛^{りゅうせい}

そして俺の首根っこを掴んでいるのが緑葉^{みどりば} 翡翠^{ひそい}

翡翠は幼馴染みで、幼稚園から今の中学二年生までずっと一緒だ。その時からか、翡翠は何かと俺を気にかけてくれている。まあ半分は暴力みたいなものだが・・・。

そんなこんなで今日も俺は、翡翠に無理矢理中学校につれていかれるのだった。

「授業とかやりたくないよぉ〜！」

強制的に連れて行かれた教室の机に突っ伏す。

「どうしたの？テンション低いよ〜？」

「おはよう、隆盛。今日は体調でも悪い・・・訳ではなさそうだね。」

俺の机の前に、少年と少女が二人ずつやって来た。

少女の方の名は奏^{かなで} 音子^{ねこ}

そして少年の方は星原^{ほしはら} 光^{ひかり}

どっちも、翡翠と同じく幼稚園からの幼馴染みだ。

俺が突っ伏しているのを見て、具合が悪いのかと疑問に思うのは付き合いの悪いやつだ。だから、俺を見てこんな反応するのは幼馴染みである三人だけだ。

特に俺は、広く浅く人と付き合う癖があるようだから、人にそれほど深くは追求しないし、追求もされない。

まあ何が言いたいかと言えば、俺のやることの意味を理解してくれるのは、幼馴染みである三人だけっていうことだ。

「よし！席につけー！」

先生が来たようだ。

学校に着いてから帰るまでの小さな束縛の時間は、昔から何も変わってはいない。いつも通りの朝、いつも通りの授業、いつも通りの昼、いつも通りの下校。何もかもがいつも通りだ。

しかし、いつもと変わらないと思っていた風景が、先生の最初の一言で変わった。

「今日は皆に転入生を紹介するぞ！」

朝の先生の一言は大体は聞き流されるものだが、今日は皆が聞き入っていた。

転入生の存在が先生によって告げられたと同時に、周りはざわめき始めた。

「転入生・・・ねえ。」

「興味ないの？隆盛。」

前の席にいた翡翠が聞いてきた。興味の有無とかじゃないのだが、何か気になってしまった。

「じゃあ紹介するぞ！入ってこい！」

ガラッ！

静まり返る教室に入ってきたのは、髪の長い少女だった。

「天地あまち きょうげつ響月と言います。よろしく願います。」

ペコリと頭を下げる少女。まるでお人形のようなイメージだ。どこかのお嬢様だろうか？

「よし！じゃあ席は銀河の隣に行ってくれ。あの一番後ろの窓際の隣が空いてるだろ？」

そう言つと、少女はゆっくりと歩き出した。歩き方も品があると

いうか・・・清楚系お嬢様って感じかな？

「銀河・・・さん。よろしく願います。」

「え？ああこちらこそよろしく。わからないことがあったら聞いてくれな。」

丁寧な頭を下げられるのは初めてで、何だか萎縮してしまう。とりあえず精一杯の笑顔でかえしてあげた。

「よし！じゃあいつも通り授業やるぞ！」

転入生を迎える空気から一転、矢のように飛び交うブーイング。いつも通り、文句を言わずに俺はお飾りの勉強道具一式と文房具を出した。

しかし・・・。

「あれ・・・？消しゴムがない・・・。」

いつも筆箱に入っている消しゴムが、何故か今日は入っていないかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0131z/>

約束の橋の上で

2011年11月30日22時45分発行